

「しずおか」の文化資源とその活用シーンを「探す」「アピールする」
オリンピック文化プログラムに向けた文化資源調査報告書

調査名 静岡県在住の外国籍アーティストの可能性を探る

2016年3月27日

オルタナティブスペース・スノドカフェ

はじめに

地方都市に暮らす私たちの生活もグローバル化の影響にあることを感じられることが多くなった。人々の流動化が進む現代はこれまでの日常とは違う景色を生み出している。例えばそれは日々の暮らしの中で接する外国人を格段に多く見かけるようになったこともある。しかし同じ地域に様々な国籍の人が生活しているという当たり前の事実は、こうした現実があってもなかなか実感できないのが普通感覚ではないだろうか。だが今後いちだんと進むであろう地域の多国籍化は、これまでとは違う生活環境を私たちに与える。その時に私たちはどのような振る舞いをし、どのような地域を作り上げていかななくてはならないだろうか。このような問題意識が今回の調査の根底にある。

1. 調査の主旨

本調査は、多様な価値観を持った人々を繋ぐものとして文化芸術が、有効に活用できると考え、その実践をしているアーティストを調査し、文化芸術が社会包摂（ソーシャル・インクルージョン）や多様性ある地域作りにどのように貢献できるのかを考察する。

異文化に住み、創作活動を実践している外国籍アーティストに絞ることにより、私たち日本人が気付きにくい習慣、様式などを再認識できるものと推察し、この調査を行うことで多様性のある文化社会の在り方や、様々な国籍を持つ県民が参加出来る文化プログラムを提案出来ると考えた。

2. 調査概要

①調査名称

静岡県在住の外国籍アーティストの可能性を探る

②調査主体

オルタナティブスペース・スノドカフェ

柚木 康裕（調査責任者）

曾布川 佑（調査員）

黒田 麻紀子（調査員）

③調査期間

2016年1月～3月

④調査方法

まず、調査対象となる外国籍アーティストを紹介してもらうために、各関係機関等へDMによる依頼、知人等への聞き込みを行った。

| DM送付先 | 返答 | 実施に至った数 |
|------------|-------|---------|
| 国際交流協会 28件 | 3件 7名 | 3名 |
| 国際交流関係 18件 | 1件 1名 | 0名 |
| 文化協会 26件 | 0件 | 0名 |
| 日本語学校 10件 | 1件 3名 | 2名 |

| | | |
|----------|--------|----|
| 知人への聞き込み | 7件 14名 | 6名 |
|----------|--------|----|

紹介等で順次アポイントが取れたアーティストに直接依頼交渉を行い、一人ずつ個別にインタビュー調査を実施。3月25日現在で11人の方のインタビュー調査を実施することが出来た。

⑤調査対象数

1. 調査アーティスト対象の条件

1) 創作活動の種類

(絵画、彫刻、現代アート、ダンス、舞踊(日本舞踊)、演劇、古典音楽、文芸、伝統工芸等)

2) 1年以上の滞在実績。(過去に1年以上滞在し、現在は海外在住でも可)

3) コンスタントに製作を続けている。(プロに限定しない)

2. 調査アーティスト数(3月25日現在)

11件

| 番号 | 氏名 | 出身国 | 性別 | 年齢 | 来日歴 | 居住地 |
|----|------------------------------|--------|----|-----|------|------|
| 01 | Liran Moshe | イスラエル | 男性 | 42歳 | 15年 | 島田市 |
| 02 | Jesse Robbins | アメリカ | 男性 | 36歳 | 9年 | 浜松市 |
| 03 | Simon Varnam | イギリス | 男性 | 60歳 | 38年 | 富士宮市 |
| 04 | Naresh Maharjan | ネパール | 男性 | 42歳 | 25年 | 焼津市 |
| 05 | David Atamanchuck | カナダ | 男性 | 64歳 | 40年 | 熱海市 |
| 06 | Amit Wagner | イスラエル | 男性 | 44歳 | 15年目 | 浜松市 |
| 07 | Francois Delvart | フランス | 男性 | 46歳 | 20年目 | 静岡市 |
| 08 | Marcial Guerrero Portillo | パラグアイ | 男性 | 54歳 | 18年 | 静岡市 |
| 09 | Deni Kurniawan | インドネシア | 男性 | 28歳 | 2年 | 富士市 |
| 10 | Jiang Wen | 中国 | 女性 | 38歳 | 10年目 | 静岡市 |
| 11 | Marlow Renato Akaboci Garcia | ブラジル | 男性 | 27歳 | 16年 | 浜松市 |

※年齢、来日歴はインタビュー時のもの(本人による聞き取りの為、1年前後の誤差はある)

⑥インタビュー方法

インタビュー場所は、アーティストが活動拠点している場所（自宅、アトリエ等）に調査員が直接出向くことを基本とするが、アーティストの意向等でカフェ等での聞き取りもあった。

インタビュー前に調査の目的、調査の活用等について口頭にて説明。その上で同意書に直筆による署名を得る。

インタビューは、1時間から1時間半を設定。実際には、1時間半から2時間弱の時間が多かった。

1. 調査項目

●当初調査開始時の質問事項

1) アーティストの基本情報

- ・氏名（母国語、カナ）
- ・性別
- ・国籍
- ・滞在期間
- ・元々の滞在理由
（日本に来た理由）
- ・VISAの種類

2) 活動内容

- ・芸術ジャンル
- ・キャリア
- ・どのように発表しているか
- ・制作環境
- ・資金繰り（資金調達）
- ・生活環境

3) あなたにとって表現行為・創作活動とは どういった意味があるか。

- ・ポリシー、
アーティストステートメント、
プライド。（哲学的なもの）
- ・あなたを支えるものなのか？活力になる？
- ・日本人が反応してくれることを期待する？

4) 静岡で行うメリット、デメリット。

- ・外国人の立場の違いを感じることもあるか。

●調査を進めていくにつれて、 質問事項を一部改変（04以降）

1) アーティストの基本情報

- ・氏名（母国語、カナ）
- ・性別
- ・国籍
- ・生年月日
- ・家族構成
- ・滞在年数（来日年）
- ・日本に来た理由
- ・VISAの種類

2) 活動内容

- ・芸術ジャンル
- ・キャリア
- ・どのように習得したのか。
- ・主たる生業（仕事）
- ・制作環境

3) あなたにとって表現行為・創作活動とは。

- ・ポリシー

4) 地域

- ・静岡県に住み続ける理由
- ・生活環境
- ・自国との違い
- ・文化芸術の受容のされ方
- ・伝統に対する考え。こだわり。
- ・居住地域との関わり。

- ・日本、静岡に元々どんなイメージを持っているか。
- 5) 自国の文化芸術との比較
 - ・文化芸術環境の違い
 - ・生活環境の違い
 - 6) アーティストとして居住地との関わりはありますか。
 - 7) 創作活動が続けるにあたり、地域に望んでいること。
 - ・アドバイスがあるとしたら何か？
 - ・コミュニティーの問題
 - ・コミュニケーションの問題。（言葉の壁）

- 5) コミュニケーション
 - ・対 日本人
 - ・対 外国人
 - ・相互理解に芸術はどう作用するか。
 - ・言葉の問題
 - ・創作活動が続けるにあたり、地域に望んでいること。
- 6) 教育
 - ・伝える
 - ・教える

※但し、調査項目は、あくまでも設定の段階として設けたものであり、各アーティストとのインタビューの進み方や話の内容に応じて柔軟性を持たせており、その結果、調査項目の聞き取り内容が異なっている。

各調査対象者の調査内容については、「調査シート」にて記載

2. 調査の様子



01 Liran Moshe さん
 写真を撮るようになったきっかけの旅行の写真を説明



02 Jesse Robbins さん



05 David Atamanchuck さん
David さんの工房「楓窯」にて

⑦調査分析

インタビュー調査は、一人一人のアーティストの来日理由や活動状況を聞くことで、パーソナルヒストリーを集めることになっていくが、集めることによって彼らの持ついくつかの共通点を見つけることが出来た。

1. 全体の分析











●性別

| | | |
|----|--|-----|
| 男性 | | 10名 |
| 女性 | | 1名 |

●来日歴

| | |
|---------|----|
| 1年～5年 | 1名 |
| 6年～10年 | 2名 |
| 10年～15年 | 2名 |
| 16年～20年 | 3名 |
| 20年以上 | 3名 |

●出身国

| | |
|-------|---|
| アジア |     2名 |
| ヨーロッパ |   |
| 北アメリカ |   |
| 南アメリカ |   |

●主な生業

| | |
|---------|--------------|
| 芸術文化活動 | 3名 ※1名は、副業あり |
| 会社員 | 1名 |
| 英語教室経営 | 3名 |
| フランス語講師 | 1名 |

| | |
|-------|----|
| 家業手伝い | 1名 |
| 国の助成金 | 1名 |
| 学生 | 1名 |

●婚姻関係

| | |
|--------|--|
| 配偶者あり | 8名 (内、日本人の配偶者が6名、日系人の配偶者が1名、国籍不明(未回答)が1名) |
| 未婚(独身) | 3名 |

●日本語の習熟度(※あくまでも調査員の印象による)

| | | |
|---|----|-------------|
| 流暢な日本語で回答、漢字も理解している | 4名 | 03、04、07、10 |
| 流暢な日本語で回答、漢字は読めないものも多い | 1名 | 01 |
| ある程度日本語は理解 掘り下げた質問事項に対して回答に詰まる | 1名 | 06 |
| 片言の日本語による回答 質問事項を明確には理解出来ていない | 2名 | 05、09 |
| 片言の日本語による回答 (日本語を話す同席者による補足説明、通訳による返答あり) | 2名 | 08、11 |
| ほぼ母国語(英語)による回答 | 1名 | 02 |

意思疎通という点において各アーティストの日本語の習熟度の違いは、インタビュー内容の深さの差として表れている。

●アーティストのタイプ

インタビューを通じて主に2通りのタイプがあるのではと分類した

| | |
|-------------------------------|----------------|
| アーティスト系：創作活動をより深め追及していきたい | 05、06、07、08、10 |
| コミュニティ系：文化芸術活動を通じて人と繋がっていききたい | 01、02、03、04、09 |
| どちらにも属さない(両方の要素を持ち合わせている) | 11 |

アーティスト系アーティストは、作品や活動を通じて、自分のポリシーや創作に対するこだわりを感じ取って欲しいと望んでおり、コミュニティ系のアーティストの方が人に教える・伝えるという行為を厭わない印象を受けた。

2. インタビューを重ねて見えてきたこと

インタビューから集めた「共通点」は、調査員にとって様々な「気づき」を与えるものでもあった。その中でも3つのキーワードが浮かび上がってきた。

- ・ 伝統
- ・ コミュニケーション
- ・ 教育

■伝統

インタビューを通じて2つの伝統があることを読み取れる。一つは、自国の伝統を守り継ぐ。伝統舞踊や音楽を継承し続けている 04 Naresh Maharjan さんや、08 Marcial Guerrero Portillo さん。また、09 Deni Kurniawan さんのようにインドネシアに伝わる昔話や伝承を演劇表現する活動や、11 Marlow Renato Akaboci Garciasa さんのカポエイラも含まれるだろう。もう一つは、日本の所謂伝統文化と呼ばれるもの。華道、茶道、書道、陶芸と言った生活文化から生まれたものや、相撲、柔道、空手、剣道と言った武道と呼ばれるものに対して、外国人が日本の伝統文化を心から愛し、忠実に習得し継承する。05 David Atamanchuck さんは陶芸、06 Amit Wagner さんと 07 Francois Delvart さんは書道に向き合い続けている。いずれのアーティストも芸術に情熱を注ぎ、自らの芸を鍛錬し続けている。調査員が聞いていて思わず「ハッとする」ような、襟を正して話を聞くエピソードが多かった。

05 David Atamanchuck ヒアリング内容より

- ・『「Good」と「Great」は全然違う。練習、練習、練習。良いものは作りたいね。楽しい、楽しい楽しい。』

(※インタビューの中でも陶芸についての知識がにじみが出る発言が多かった。)

07 Francois Delvart ヒアリング内容より

- ・『だからその書に対する逆にその大事な姿勢ですよ。真剣に向き合うか。自分と向き合
って、真剣にやる・・・その姿勢が大事だと。だから空手も書道も同じだと。』
- ・『古典を徹底的に勉強するという意味で、僕はすごく良い意味がある。だから、昔から流
派とか会派って、重いものを背負っている。』
- ・『特に書道の場合は、伝統的な考え方からすると、伝承する。伝える。要するに伝承する
という宿命みたいなのがあって。で、何を伝えるかということ、先ず伝統というか、古典
ですよ。古典が普遍性あるもの。その1つの型の中で自分を見つめるという。その技
法は勿論、高めることも出来ますし、それからそれだけの3千年以上の歴史を持つ書道
だから、その中で必ず自分に合う書風とか、字があるはず。だから、そういう稽古をす
る。それが、主な仕事。それが古典中心にやってきた。これからもしていきたいと思っ
ているんですけど。』

■コミュニケーション

異国の地で、文化・芸術活動をするには、コミュニケーション能力が自ずと必要になる。アー
ティスト活動はともすれば孤独な活動と捉えられることもあるが、今回インタビューに応じてく
れたアーティストは、元々のコミュニケーション能力の高さや、人と繋がりたいという意識が高
い印象を受けた。

その中で08 Deni Kurniawanさんは、来日歴が浅く、日本における自分の文化芸術活動の拠点や
機会を見いだせていない状況にあった。

08 Deni Kurniawan ヒアリング内容より

- ・『（日本で）演劇の活動はしない。全然しなかった。結構後悔です。1回演劇したなあ
と。でもなかなかチャンスがなかったから。』
- ・『時間がないという事より、富士市に（劇団）があったら良いなあ。でも近くななかつ
たから。まあ、いいやと。諦める訳ではないんだけど・・・（インドネシアに帰った
ら）やるよ。絶対に。燃えている』

また、外国人が日本で生活するにあたって制約が多いことや、外見も異なる外国人に対する日
本人の態度を指摘する声も聞かれた。

01 Liran Moshe ヒアリング内容より

- ・『家を借りること一つとっても、外国人が活動するに壁がある。まず壁を取り除かない
と、オリンピック(2020年東京五輪)があっても。』
- ・『日本の外国人に対する制度も厳しい。』

02 Jesse Robbins ヒアリング内容より

- ・『写真を撮られていることに気づいていないような写真を撮りたい。でも自分が日本人じゃないから、すぐに気づかれる。アメリカでは白人だろうと黒人だろうと気にしない。全部がミックスしているから。でも日本は外国人とわかると変わってしまう。写真撮っていいかと尋ねても、よく「NO」と言われる。なぜだめか分からない。たぶん外国人だから。私自身は普通に居たいのに、外国人であるが故に目立ってしまう。普通に居させてもらえないことにデメリットを感じる。』

04 Naresh Maharjan ヒアリング内容より

- ・『（静岡市の国際交流協会で、先日青葉公園にてマルシェを開催した。エピソードより Nareshさんは、ステージの司会を務めた）安上りに異国の雰囲気を楽しめるのに、足を踏み入られる日本人が少ない。やはり、ある種のハードルがあるのでは。日本人は（外国人を）怖がっている。ハードルを下げたり、壁を壊す仕組みがあれば。』
- ・『自分は（外国人であるという）意識がない。積極的に交流を図るかどうかはその人の意識の問題、個人の問題だと思う。』

さらに日本人と外国人との相互理解に対する芸術の果たす役割についても質問項目の一つとして各アーティストに投げかけた。

06 Amit Wagner ヒアリング内容より

- ・『（少し考える）なんか、芸術はピースフルな話題、課題。人を一緒に集まって、例えば展覧会があると友達が来て、普通の一般人が来て、コンタクトになる。人と人のコンタクトになって、摩擦のないコンタクト。芸術に観に来る人に必ず良い雰囲気の話になる。心いやす。』
- ・『（原発）再起動賛成と反対の人がいても、芸術（この作品）をみると同じように楽しめる。人はそれぞれ違うけれど、同じ人間だから。そういったものに気付かせる力がある。』

07 Francois Delvart ヒアリング内容より

- ・『日本の文化は「体験の文化」と言われている。その通りだと思います。その体験して、残る感覚として、そのあとはやっぱ生かす力が必要になってくると思うんですけど、そこは別の能力が必要だとは思いますが。その体験というのは自分と向き合う。直接に物と・・・体験の質、良い質問ですよ（笑）、でも人と会って人に会うのも「縁」とか大きな体験ですよ。生身の同じ人間にありながら自分と違う、人との話し合っこう、感じる部分がありますよね。だから、自分にある意味戻ってくる。お互いに。体験って大きいと思うんですよ。あと、自分が一つの積極的に何かに関わるとする姿勢。何か生じるんですよ。其の人は何を求めるかということですよ。』

10 Jiang Wen ヒアリング内容より

※彼女の役者論の一部になるが、演劇の力はその空間を一つにすることが出来ることを述べている。

- ・『実際、理想な役と環境の融合は、私の心からこの役が出て来て、どこに行っても空気をエネルギーを全て私の役の中心に回り始めて、会場すべてがその世界に包まれる。小宇宙みたいに。全て環境はその小宇宙の一部になる。それが一番気持ち良い。まさに世界が調和されている状態。それは、環境の1部、私達は世界そのもの。目立たない、その世界そのもの。空気の一つの分子みたいに自然に存在している感じ。すっごく気持ち良い感じ。』
- ・『さらに観客もその世界に巻き込む力が持ったら、一緒に何十倍ぐらいに膨大させる。楽しさも倍増するじゃないですか。変な話何だけど、お客さんと呼吸まで一致しているのが感じる。この状態が舞台が上手くいっている時。これが上手くいったら、良い舞台になれる。』

芸術を通して出来る「つながり＝コミュニケーション」とは、その場所で営まれるもの。大切なものは目に見えない。目に見えるようにするのがアーティストの仕事、芸術の役割であり、それを観た人たちは、アーティストが表象ではなく伝えたかったことを自分なりに感じ、考える。それが、芸術のコミュニケーションと言えるのではないだろうか。今回のインタビューに応えたアーティストは、各々の方法で真摯に芸術に向き合うその姿勢を汲み取ることが出来た。

■教育

今回の調査で一番の収穫であったのが、「教育」についてである。各アーティストが芸術との出会いやどのように習得・体得してきたか。その過程を聞き出す中で、彼らの幼少期に受けた文化芸術に関する学びや体験が、のちの文化芸術に対する考え方や自ら習得した芸術を人に伝える上でのポリシーに大きく関わっていることを知る。

そこに気付くきっかけになったのは、03 Simon Varnam さんのインタビューであった。このインタビューの後に、質問項目に「6.教育」を加えた。また、彼ら自身の文化芸術体験について知ると同時に、日本の教育システム(部活や習い事の在り方)に対する批判を聞き出すことが出来た。

03 Simon Varnam ヒアリング内容より

- ・『知り合いで音楽隊に入っている人がいて、「口(くち)」（唇）を見てもらい、どの口がどの楽器に合うのかみて、ホルンが良いという話になった。自分の意志ではない。』
- ・『音楽は遊びの一つと思っていた。音楽を学問の一つとは、全然思っていなかった。中学校にいる間も「音楽」を選択しなかった。楽器吹きたい気持ちが強く、科目としての音楽そのものを学校では勉強しなかった。楽器吹きたい！音楽は勉強しなかった。』

- ・『時間が経たないと育たない。基礎が難しいから、2年経たないと演奏会に出せない。でも部活は2年生で引退だから、中学校の金管楽器でも、無理矢理やって、かなりまずいことになっている。子どもが良くない使い方をしている。コンクールに合わせてやっているのに、コンクールに高い音が入っているとそれを無理矢理出そうとする。音が「イー！」って。今は断っているんだけど、中学校・高校のアンサンブルの演奏大会の直前に見てくれないかと頼まれることがある。でもそれでは遅い。』
- ・『元々靴を逆に履いているような感覚。(間違った指導のことを例えている：根本的に間違っているということ) 今日正しい靴の履き方に直しても、子どもが走れなくなる。かえって私がしたいような指導は子どもにとっては逆効果になるのでは。だから、楽器を持ち始めた時に一緒にいたい。初めて吹いた日に正しい方向性を示してあげたい。』
- ・『先輩に教わるのは伝言ゲームになる。10年前に先生が言っていたことが、だんだん意味が変わってしまう。中学・高校の先輩の指導がいかにも怪しいものか。』
- ・『プロがやるには、アマチュアの深い層があってからこそ。それがなかなか分かってもらえない。』

06 Amit Wagner ヒアリング内容より

- ・『理由の一つは、日本の教え方は良くないと思う。多くの子どもは、「書道」を嫌うようになっている。学校の勉強面白くない。学校の授業終わったらやりたくなくなる。楽しくなければ絶対続かない。楽しい教え方でやれば、もっと続く。子どもが増えると思う。でも、楽しくないから、「書道ヤダ」って。』
- ・『子どもは遊びたいね。だから、厳しく教えないように。楽しく。ただ、書いてだけでも良いよ～。って。この勉強すれば面白いなって子どもが思う。子どもの脳は柔らかいからね。スポンジみたいに。硬くなる前に。』
- ・『私が書道を初めた時、間違えたね(笑)でも先生がこれがダメとか違うとかは一度もしたことはない。もうちょっと解るようになったら、「ここはこーすれば良い、こういうポジティブな教え方で、ダメって言葉は使ってはいけない。ダメって言葉は、緊急な時に使う。緊急というか例えば本当に危ない時に。(間違っているということは)大したことではない。』
- ・『でも展覧会をみると、すごい厳しい先生いるらしい。展覧会、先生のようなスタイルの作品は、みんな同じような。変わりがない(変わり映えしない)。だから、先生が生徒を遊ばせない、ただ厳しくこういうスタイルだけで書きなさいって言う感じ。青嵐(せいらん)(大谷青嵐)先生は、なんか展覧会の時に「自分の作品にしてみて」。遊んで、遊んで。』

08 Marcial Guerrero Portillo ヒアリング内容より

・『日本の教えている人達というのは、曲を覚えに（パラグアイに）行って、曲目レパトリーを増やして、（日本に）帰ってきて曲を教える。教えるための勉強はしていないし、そこは大きいと。自分は、その人のレベルに合わせて、曲というものからその人に合わせてキチンと教える。教えるのが違うですよね。最近の若い子達は、短い期間で沢山の曲を覚えたいから、完璧には覚え方はせずに、取りあえず録音だけはしてきたから、曲の大事な部分だけはつかんで、帰ってきてから練習しよう。そういう形で戻ってきてそのまま教えてしまう。そこは、かなり違う。キチンとした音楽やリズムという所はつかめずに。』

11 Marlow Renato Akaboci Garcia ヒアリング内容より

・『本当言うと、日本のスポーツでプレッシャーがすごいあるので。野球とか（笑）。指導、教え方にプレッシャーがある。カポエイラは、あまりそういったことがないので。皆フリーと言うのか、自分の気持ちに自由。日本のスポーツが厳しい。俺、昔サッカーが好きだったので、部活でやっていたがなんかあんまり上手にならなくて……。他にやるって決めていて、ブラジリアン柔術とかやって、青帯になっていて、カポエイラ見ているすごいなと思った。両方やって、両方進めると（両立が）難しいですよね。それで、どっちが良いか決めてカポエイラに進んだ。純粋にカポエイラそのものが格好良いと思ったから。』

共通して言えることは、日本の習い事や部活動はともすれば、芸術との不幸な出会い方を招いている。芸術はもっと自由なものにあるにも関わらず、一度「習い事」や「部活」という枠組みで括られてしまうと、我慢して覚えさせるものや、答えを求められるといった窮屈なものにしてしまう。また、部活や芸道における「先輩・後輩」の関係はさらに悪化する要因にもなりかねない。芸術の出会いや習得方法は各国で多様であるが、子どもの内からいかに幸福な文化芸術体験をさせ、早い内から本物の文化芸術に触れることが重要ではないだろうか。

3. 調査を通じて提案出来ること ～文化プログラムを考えるにあたって～

インタビュー調査を経て導き出した3つのキーワード「伝統」「コミュニティ」「教育」から次のことを提案したい。

①外国籍アーティストを活用した文化事業の創出

- ・「ふじのくに子ども芸術大学」への外国籍アーティストの登用

「ふじのくに子ども芸術大学」は、県の主催事業として、様々な分野で活躍するアーティストやクリエイターが講師となり、県内の子ども達に文化・芸術の楽しさを伝えるワークショップとして展開している。

子ども達に本物を触れさせるアートの可能性をより引き出す為に多様な講師、多様なプログラムを提示する必要がある。今回のインタビューからだけでも、外国籍アーティストの存在、その文化芸術活動が、私達に多くのことに気付かせる結果を生み出した。外国籍アーティストも立派な文化資源として多くの可能性を秘めている。様々な文化のバックグラウンドを持つ彼らのスキルや文化芸術に対するポリシーを持って子ども達に接することは、文化活動を通じた多様な価値観や裏打ちされた本物の芸術に触れる機会をもたらす。活躍の場を求めている外国籍アーティストも少なくない。子ども達に幸福な文化芸術の出会いを創出する為にも、外国籍アーティストの活用は必要になるのではないだろうか。

②外国籍アーティストが活動しやすい窓口、環境を整える

・県内在住外国籍アーティスト向けのデータベースの構築

今回の調査で改めて、異国の地に根を下ろし、自分の活動の場を創出していくには長い年月がかかるのと、外国籍アーティストの存在を知ってもらい、活動の場を支援する環境が必要と感じた。支援する環境を整えることは、もちろん日本人アーティストにも言えることだが、「外国人」という壁を乗り越えて活動していくには相当のエネルギーが必要となる。

外国籍アーティストも活用出来るデータベースの構築は、外からの外国の人達が気になるような情報を発信できるような。来日して間もないアーティストも活用できるようなものが望ましい。データベースそのものが、文化芸術活動に寛容でグローバルな静岡県をPR出来るのではないだろうか。

③今一度自国の伝統文化を捉え直す

・日々の行いから生まれる「伝統芸能」を「運動」として捉える

対話を通じて外国語としての日本語を聞きながら、多くの言葉や単語が心に残った。フランス人の書道家、07 Francois Delvart さんが語った「行(ぎょう)」は、日本人の身体や日々の所作についてまで考えさせる言葉だった。そこからオリンピック文化プログラムという視点でこの言葉を見渡すと、書道や茶道、華道といった伝統芸能を日本らしい「運動」として、捉えることができるのではないかと思える。高度な修業者の持つ深い精神性に支えられた運動は、一流のアスリートが与える躍動感と何ら違うものではない。日々培われた所作を見せるという意味でもスポーツと変わることはない。伝統芸能を運動として捉える新しい視点。そのような日本らしい運動をオリンピック文化プログラムで見せるのは「文武両道」という日本の精神を伝えていくことにもなるはずである。

おわりに

全国で盛んに行われている野外芸術祭によって、芸術が地域社会に役立つものとして見直されている。今回の私たちの調査もその認識を持って始めたが、調査が進むにつれて「役立つ」以前に芸術の本分に気付かされる結果となった。芸術を極めていくには自らと向かい合わなければならず、日々の鍛錬を経て創り上げていくものであると、調査対象者のヒアリングを通して再確認した。その行為は直接的に誰かのため、地域のためと言えるものではない。強いて何のためかと言えば対象となる芸術を更新するためと言えるだろう。

それでは他者のためでない芸術は人々をつなげることが不可能だろうか。もちろん可能である。ただそれは通常のコミュニケーションの方法ではなく、芸術特有の方法がとられる。国籍を異にした今回の調査対象者は皆同様に自らの創作を深めていく過程で、他者と出会っていく。出会いの出発点は「違い」である。現代の芸術は異なること、オリジナルであることが重要視されるが、それはとりもなおさず違いを生み出す。その違いがあるからこそ、何が同じであるかを考えることができる。この逆説こそ芸術のコミュニケーションであろう。

差異を認め相互理解に至るプロセスが結果的に芸術には期待できる。だとすれば外国籍アーティストはよりダイナミックにその可能性を引き出すことができる存在である。様々な違いがネガティブな要素となり地域社会の問題として噴出する中で、芸術はポジティブな違いを創出できる数少ない手段である。その違いを共有することは、寛容性を生み出し、多様性を認め合う社会への一助になるものと考えられる。外国籍アーティストの存在を認知してもらい、支えていくことは社会の豊かさにも通じていくと今回の調査で確信した。